
M大写真部副部長の喧騒

柏木杏花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M 大写真部副部長の喧騒

【Nコード】

N0777Z

【作者名】

柏木杏花

【あらすじ】

M 大写真部。ここは個性が強すぎる後輩が、むやみやたらと集まってくるサークルだ。絶世の美女にしか見えない一年男子とその彼女。その彼女の辛辣な女友達。ブログの女王に、鉄道マニアの撮り鉄。こんな写真部の副部長を、なぜか平凡きわまりない俺がつとめている。いろいろあるけど、それなりに平和にやってきた。だがある日、俺に許嫁が湧いて出た。しかもその許嫁が小学生ってなんぞなんだ！俺は自慢じゃないけど十歳年下より、十歳年上の方がいいんだよ。こういう価値観って十年後も二十年後も、変わらない

と思ってるのに！ イマドキの草食男子、松浦惣介のだいたいドタ
コメ。ちょっとラブコメ。軽くて楽しい話がお好みの方は、お試し
ください。

第一話

突然の婚約話

「惣介、ちよつと惣介」

「はあ？ なに？」

その日、土曜日の午後だというのに、珍しく家でゴロゴロしてたのが悪かったのか、晩ごはんを作ってるお袋にからまれた。

俺は松浦惣介。^{まつうらそうすけ}M大経済学部三年、写真部副部長。他に特筆すべき事柄は、あいにく持ち合わせていない。

自分で言うのも虚しいが、どこにでもいる普通の大学生だ。

「いい若者がいたらと鬱陶しいわね。あんた、つきあってる彼女とか、いないの？」

「いないよ」

リビングのソファーに寝そべり、雑誌に目を落としたまま、俺は生返事だ。彼女がいたら、土曜に家でゴロゴロしてるわけがない。

平和だ。平穏だ。平凡だ。

子どもの頃から住み慣れた住宅街の一戸建て。夕飯の準備にいそしむ母親から多少からまれたとしても、どうってことはない。

この日はM大の学祭が終わって最初の土曜日だ。副部長という名ばかりの肩書のせいで、写真展ではメインで働いてきたから、家でこんなにのんびりするのも久しぶりだった。

もっとも今夜は写真部の打ち上げコンパだから、夕方には出かけるのだが。

「情けないわね。せつかくひとが、そこそこイケメンに産んであげたつてのに、覇氣がないったら……」

覇氣がないのは、まあ認める。万事無難つてのは、俺の個性なんだよな。無難が個性つてのはちょっと変か。

だいたい、イケメンにそこそこつて付けてる時点で、産んだ本人も息子を平均点だと評価してるってことだ。親の欲目つてのはないのかな。

「まあでも、ちょうどいいわ」

「なにが？」

「実はあんた、許嫁がいるのよ」

「はあ~~~~~？」

平凡な俺の、平凡な人生は、こんなひと言で転がり始めた。

許嫁……？

許嫁つて、もしかして、もしかしくなくても、婚約者みたいなもんだよな？　みたいというより、そのものなんだろうけど、いきなり許嫁の存在を突きつけられた男なんて、この程度は取り乱すだろう。それにしたつて、この平成のご時世に、結婚相手を親が決めるなんて、一般庶民があり得るの？　あり得ないよなあ。

「母さん、それ、なんの冗談？」

手に持っていた雑誌をテーブルの上に放り出して、俺は座り直した。対面式のシンクで料理の下ごしらえの手を休めることなく、お袋は平静を保っている。

「冗談なんかじゃないわよ。どうせあんたのことだから、だれが相手でもたいして変わらないんでしょう。ならいいじゃない」

「違うないわけないだろ。なに言ってるんだよ。だいたい、俺まだ大学生なんだから、結婚なんてあり得ないし……」

「だれがいますぐ結婚しろなんて言ったのよ。婚約よ」

そんなに違わないだろ。いますぐか、あとかの違いじゃないか。

「とにかく、相手くらい自分で探すから、許嫁とか完全に却下だからね」

「ものすごく可愛い子なのよ。気にならない？」

「ならない」

「ほら、それよ」

それって、なんだよ。勝ち誇ったみたいに、ふんぞり返って。

「普通、年頃の男子大学生が、許嫁がいて、その子が可愛いって訊けば、どんな子が気になるはずじゃない。それが間髪入れずに気にならないって言い切るのは、おかしいわよ。異常よ。非常識よ」

「非常識なのは母さんだろ。だいたい、万が一『気になる』とか言

「つたら、一気になだれ込んで結納の日取りは……とか決めかねないじゃないか」

そんなトラップに引っかかるほど、俺も伊達に二十一年間、お袋の息子をしてはいないんだ。

「……まさか惣介、あんたホモか不能じゃないでしょうね」

言うに事欠いて、なんて推測をしゃがるかな、このおかんは。

「で、どっちなの？ 白状しなさい」

ちよつと待て。なんで二者択一なんだよ。

「どっちも違います！」

いい加減、怒鳴りたくなってきたが、あいにくチャイムが鳴ったので、俺は気を削がれた。

「惣介、出てよ。いま手が離せないわ」

今夜のおかずはハンバーグか餃子なんだろうな。お袋の手が、ひき肉の油でテカテカに光っていた。

第一話

突然の婚約話（後書き）

はじめまして。お読みいただいて、ありがとうございます。

もう少し煮詰めてから投稿したかったのですが、結局、見切り発車です。

できるだけ、2、3日以内に更新していきたいのですが、途中で止まるかも（<―>、）

4日以上間が空くときは、活動報告でお知らせします。

久しぶりのコメディーですけど、読んだ人がコメディーのジャンルに入れてくださるのか、妙に不安な船出です。

お気づきのことなどありましたら、教えていただけると嬉しいです。明日も更新予定です。

第二話

なんで許嫁が小学生なんだよ！

俺は頭を掻き毟りながら、不承不承、玄関に向かった。扶養家族の分際は盛大に辛い。ドアを開けると、待っていたのは斜め向かいに住む女の子だった。

学年は確か、小学五年生だったよな。いまどき、ませた子も多い中で、小柄でおさげなもんだから、年より幼く見える。

「凜ちゃん、どうしたの？」

「雄介くんいる？」

雄介は俺の弟だ。二歳年下で、四月からF大に通っている。大学生に小学生が『くん』づけで呼んだりするんだが、凜は俺にも『惣介くん』だ。これは、凜の親が俺ら兄弟をそう呼ぶからである。小さい子どもは、親の呼び方をそのまま真似するからな。

呼び方が変わるの、中学に行って、部活とかしてからなんだろうなあと、俺は思ってる。べつにいまの呼び名も嫌じゃないし、構わないんだけど。

生まれたときから知ってるし、家族の延長みたいな存在だ。

「いま、バイトに行ってるよ」

「そっかあ。残念」

「どつかしたの？」

「算数の宿題、わかんないところあるから、教えてもらいたかったの」

そういえば雄介が、ときどき、凜の勉強みてるって言ってたな。

「俺でよかったら、みてあげようか？」

「いいの？」

「いいよ。どこ？」

教科書が出てくるのかと思えば、凜が手にしているのは小学五年生のドリルだった。なんとも懐かしい代物だ。裏返すと『しょう野りん』と小学生らしい文字で名前が書かれてある。まだ習っていない漢字はひらがなだから、庄野凜とは書けないらしい。

わからないという問題を指差されて、俺は唖った。時間と距離の応用問題だ。これは確かにちよつとややこしい。少なくとも、紙に図を書いてあげないと、わかるようには説明できない。

こんな玄関先で机なんかあるわけないし、やっかいだな。そんなことで思案していると、お袋がエプロンで手を拭きながら出てきた。

「惣介、どなただったの……あら、凜ちゃん。ああ、宿題しに来たのね。あいにく雄介は留守だけど、惣介でもどうにかなると思うし、上がって教えてもらいなさい」

「母さん、F大よりM大の方が偏差値、上なんだけど……」

「自分で問題を解くのと、ひとに教えるのは別よ。あんたは苦労もせずに理解しちゃうから、わからない気持ちかわからないのよ」

さすが母親。案外、鋭い。実際俺は、理解が早いと言われている。苦手な教科もないが、得意な教科もない。

雄介は苦労して理解する奴だから、一度身に着けた知識は大事に

するし、好き嫌いもはつきりしている。小学生に勉強を教えるのは、雄介みたいな奴の方が、向いてるのかもな。

わざとらしく肩をすぼめて見せてから、リビングに行こうとして、お袋に腕を掴まれた。

「四時から韓流ドラマがあるの。全力で見ないと命にかかわるから、自分の部屋で教えてあげてね」

それでこんな早い時間から、ひき肉をこねくり回していたのか。

「間違い起こしちゃ駄目よ」

相手は小学生だぞ。どんな間違いがあるって言うんだ。

「惣介くん、間違いってなに？ 算数？」

「……間違いなんか全然ないから、大丈夫だよ」

凜の頭をなでながら、俺は溜め息をついた。

凜は俺の部屋に入ると、もの珍しそうにキョロキョロした。そういえば、俺の部屋に入るのは初めてなんだ。親同士が懇意にしても、それぞれの子どもは年も離れているし、それが普通だろうけどさ。

「写真がいっぱい」

壁のボードにはぎっちり写真が貼り付けてるし、机や本棚の空い

てる場所にはフレームに収まってる写真が所狭しと置いてあるから、写真まみれに見えるんだろう。それでも飾ってあるのは、ほんの一部なんだが。

「写真部だからね」

中学からさほど変わり映えがしない部屋は、ベッドと勉強机、あとは壁の本棚しかない。

納戸からコタツ机と座布団を持ってきてもいいんだが、どうせ宿題も二、三問教えればいいだけだろうし、面倒だ。俺は凜を勉強机に座らせて、雄介の部屋から椅子だけ持ってきた。隣に腰かけると、凜が愉しそうに笑った。

「家庭教師のコマーシャルみたい」

言われてみればそうだな。

「雄介に教えてもらうときは違うの？」

「雄介くんは一階で教えてくれるよ」

そうだな。そんなに頻繁でもないみたいだし、今日だってこんな問題じゃなきゃ玄関先だってかまわなかった。

凜がわからなかった問題は、だれでも躓く問題だ。^{つまづ}1時間70分は130分。1.8キロメートルは1800メートル、と考えなければ解答できない。けれど、130分は何時間何分ですか？ という問題に慣れているから、分に戻す発想になれないんだろう。

凜は最初こそ首を傾げていたが、途中で「あ、そっか、わかった」と声を弾ませた。

理解力が高い方ではないが、集中力はあるみたいで助かった。

他の問題も同じ応用で解けるものだったから、宿題は案外あっさり、終わらせることができた。

「惣介くん、ありがとう」

「どういたしまして」

持ってきた荷物を手提げ鞆に詰めると、凜は机の上のフォトフレーム手に取って呟いた。

「このお姉さん、すごく綺麗」

「ああ、そうだね」

俺は頷いた。綺麗なのは間違いない。ただ、お姉さんではなくて、お兄さんだけど、小学生に説明するのも面倒なので細かい情報はスルーだ。

「惣介くんが撮ったの？」

「そうだよ。大学の後輩なんだ」

「へー、大学の女のひとつて、みんなこんなに綺麗なの？　なんかアイドルみたい」

「その子はちょっと、特別だよ」

この写真は久しぶりに納得できるものだったから、自分でも気に入っている。一番、目につく場所に置いておきたいくらいには。

「凜ちゃん、おばさんまだ帰ってないの？」

「うん。今日は夜勤なんだって」

慣れているのか、寂しさを表情に出さないのが、かえって痛々しい。一人っ子だから、家に帰っても誰もいないんだよな。

凜の母親は看護師で、夜、帰れない日もあるらしいし。いや、今日は土曜日だ。親父さんはいないのかな。

「俺はこれから打ち上……」

打ち上げコンパと言いかけて口を噤んだ。小学生にはわかりにくい言葉だと思い、言い直す。

「えっと…飲み会に行くけど、しばらく下にいる？ お袋と韓流ドラマ観なきゃいけないけど」

「ううん、帰る」

一人で待つのは慣れてるのかな。そもそも一人でいるのが寂しいのか、羽を伸ばせて愉しいのかもわからないんだよ。俺だってかつては小学五年生だった時期があったはずんだけど、なにが出来て、なにが出来ないのか、さっぱり思い出せない。

俺の場合、これくらいときは、ほとんどお袋が家にいたし、雄介もうるさくまとわりついてたからなあ。

「お父さんがもうすぐ帰ってくるから」

「そっか」

「飲み会ってなんか、お父さんみたい」

小学生からしたら、俺らのすることなんか父親と変わらないんだろうか。実際、来年就活が本格化して、うまく内定をもらえば、再来年は社会人だ。

やることなすこと、父親世代と同じになる。そうになると、お袋が言った婚約者も現実味を帯びて迫ってくるのかな。

俺はうんざりした気分で溜め息をついた。

「どうしたの？」

「ああ、いや、さっきうちのお袋が、許嫁がどうのこうのって言うてたんだ。まあ、冗談なんだろうけどね」

小学生相手に、なにを愚痴こぼしてんだろ、俺は。

「許嫁の話、まだ訊いてなかったの？」

「？ 凜ちゃん、なんで知ってたんの？」

「なんでって、惣介くんの許嫁、あたしだから……」

お袋が言ってた、ものすごく可愛い許嫁って……凜……？

そりゃ、可愛いだろう。小学生なら、たいていは。

俺がその場で卒倒しかけたことは、言うまでもない。

第二話

なんで許嫁が小学生なんだよ！（後書き）

第三話

学祭打ち上げコンパ

「お疲れ様」

「無事終わってよかったね」

「かんぱい」

M大から一駅のこの居酒屋は、写真部がコンパでよく利用するチェーン店だ。

新人生歓迎コンパ、学祭打ち上げコンパ、卒業生追出しコンパ、この三つをここで行うのが慣例になっている。二階を貸し切ることができるので、気兼ねなく騒げるのだ。

今日参加しているのは、全部で十五人ほど。

四年は内定をもらっているか、大学院に残ることが決まっている者しか来ていないので、他のコンパに比べると出席率は低い。

「今年は本当に良かったよな。去年とは比べ物にならないくらいデキも日程も立派なものだったぞ」

自嘲気味に頭を掻いて苦笑するのは、隣に座っている篠崎部長だ。学祭は二、三年が中心になって運営するから、四年の部長は、去年メインで動いていた。

学祭で、写真部は個人写真の展示会とは別に、小さな写真をモザイク状に貼り合わせて巨大な名画を制作するのがここ数年、恒例になっているのだが、その名画が特に好評だった。

「佐々木が頑張ってくれたんで」

俺が名画の責任者をねぎらうと、向かいに座る佐々木は照れくさそうに首を振った。

「いや、写真が早い段階で集まったからできたんすよ。亜衣ちゃんのおかげです」

がっしりした体格で、色も黒いから熊みたいなやつなんだが、こいつは写真部の有望株だ。カメラの腕もさることながら、フォトシヨップをデザイナー並みに使いこなす必殺技を持っている。全然似合わないのに……。

どう見ても、ラグビーか柔道でもやらせた方が、向いてそうに見えるんだけどな。

「訊いたよ。ブログの女王が、モデル集めに協力してくれたそうだな」

ブログの女王、外村亜衣とむらあゐは、今日のコンパに来ている。写真部ではないが、学祭で多大な協力をしてくれたので、感謝の意を表して招待したというわけだ。

「ほんと。亜衣ちゃんには超感謝だね。写真部は、足向けて寝られないよ」

亜衣に手を合わせて拝んでいるのは、小畑こはたさくらだ。文学部二年。飲み会好きのお祭り娘。明るく元気で、性格は少々辛辣ってところかな。

どうでもいいけど、いつまで拝んでいるんだか。あれじゃ亜衣は仏像扱いだ。

案の定、拝まれている本人は、盛大に嫌そうな顔をしている。

「さくらさん、拝まないでください。まだ生きてますから」

亜衣も似たような感想を抱いたのか、迷惑そうに頬を引きつらせていた。さくらは念仏でも唱えそうな勢いだっただもんな。

でも、なんだかんだ言っても仲は良いよ。亜衣も学年は一年だけど、さくらと同じ文学部だし。文学部の女子は、しょっちゅうつるんでるよな。よほど、気が合うんだろう。

「とにかく、今年は亜衣ちゃんのおかげで、写真部も勉強になったよ」

「え？　そうなんですか？」

意外そうに首を傾げる亜衣の顔は、正統派の美人だ。ちょっと欠点が見当たらない。陽気で人当たりもいいから写真部の中にも、ひそかに思いを寄せてる奴がいるんじゃないのかな。

「ブログで告知すれば、写真部の活動も周知できるし、賛同してもらえるんだってわかったからね」

「確かに去年までは思いつかなかったよな。学外のひとに、大々的に名画のモデルになってもらおうなんて」

腕を組んだ部長が、感心しきりで何度も頷いている。

名画を制作するのに、千枚近くの写真を貼り合わせるのだが、その一枚一枚にひとを入れる。言わば証明写真を繋ぎ合せるような作業だ。

去年までは、ほとんどが学内の学生に頼み込んで撮影していたから、数を揃えるのが大変だった。搬入ぎりぎりまで部長や俺ら数人

が大学に泊まり込んで、最後は自分たちで撮り合いながら穴を埋めていく、地獄のような修羅場だったのだ。

ネットをいかに活用するか、この辺のことは、また来年の課題だな。けれど、布石を置けたのは大きな収穫だった。俺は感謝の気持ちで、亜衣のグラスにビールを注いだ。

「ところで部長、就活は終わったんでしょ？」

「おかげさんで」

「おめでとうございます……って二回目なんですよね、お祝い言うの。春に内定もらったのに、就活続けてたってことは、納得してなかったんですか？」

部長がジョッキを傾けるのを、俺は久しぶりに見た気がした。実際、長い間、一緒に飲む機会がなかったんだよね。

「まあな。やっぱり、ちょっとでも理想に近いところを目指したかったし」

「耳が痛いですよ。俺もカウントダウンが始まってますから」

「松浦、お前は話が来てんだろ？ 学祭の写真にどっかの出版社が興味を持ったって訊いてるぞ」

「ええ、ありがたい話なんですけど、あれはモデルの力ですからね……」

学祭で好評だった名画の取材に来ていた雑誌社が、ついでに見ていった写真展で、俺の写真に興味を持ってくれたというわけだ。で、その写真のモデルが……、

「瀬戸柚希せとゆずきか。そういや、あの子の正体訊いたときは、正直、腰が抜けるほど驚いたぞ」

部長は、少し離れた場所に座る柚希を眺めて、大きく唸ると首を傾げた。

「いまだに信じられん。あの絶世の美女が男とは……」

「同感です」

俺の部屋にある写真は、夏休みに写真部の後輩を写したもののなんだが、その後輩が柚希だ。凜が「このお姉さん、凄く綺麗」と言った、あの写真である。

柚希が抱える問題は極めて複雑怪奇で、説明すると長くなるが、ひとことと言ったら、現在の柚希は女装の達人ってところかな。現に今日も、読者モデル並みに可愛らしくセンスのある着こなしを披露している……らしい。ここに着いた途端、女の子に囲まれて、そう騒がれていた。俺にはイマイチよくわからないが。

法学部の一年。亜衣とは中学からの同級生だ。

柚希は一時、悩みを抱え込んでいた時期があって、相談に乗ったりしていたから、俺にとっては妹みたいな存在である。男だけ……。

「男にしろくの、勿体なさすぎだろ、あれは」

「部長には、長年連れ添った彼女がいるでしょうが」

「長年過ぎて、空気みたいだけどな」

確か、半同棲状態と訊いたような、訊いてないような……。

「そんなに長いんですか？」

「小中高、一緒だよ」

「それじゃ、幼なじみの域ですね」

「まあな。つきあい始めたのは中学に入ってからだけど」

お互い、成長過程を見届けた者同士の恋愛とは、いかなるものな
んだろう。正直、想像できない。空気みたいと言われても、それも
考えられないよ。

「結婚とか、考えるんですか？」

「考えないと言ったら、嘘になるな。他のだれかと……とは到底思
えないし、いずれ時期が来れば、あいつと一緒にになるだろ」

「小学校のときから、意識してました？」

「いや、からかって遊んでたな」

だよな。小学生で恋愛とか結婚なんて、考えないよな、普通。結
果として小学校からの同級生が結婚相手になることがあってもさ。
俺だって、小学生の時に、それなりに好きな女の子くらいはいた

はずだけど、いまは顔も思い出せないし。

凜に「許嫁って、あたしだから」と言われたあと、我に返った俺は、お袋に怒鳴り込もうとして、かろうじて止めた。韓流ドラマに相對しているお袋の邪魔をしたら、どんな祟りがあるかわかったもんじゃない。

あのひとは我が親ながら、正気の沙汰とは思えないようなところがあるからな。俺の忍耐力は、あの母親の所業が育んだものかもしれない。

俺はビールのジョッキを傾けながら、肩を落とした。

まさかあの婚約話が真剣なものじゃないだろうけど、凜の耳にも入ってるのが気になる。凜が知ってるってことは、向こうの親も絡んでるってことだよな。うーん、どうなってんだろ。

「どうかしたのか？ 元氣ないな」

部長が肩を組んで寄りかかってきた。からんでるのが酔ってるのか、どっちなんだろう。しかしこのひと、眼鏡がよく似合うよな。なんかこう、科学者っぽい印象だ。期待を裏切らない理学部だけど。

「部長、実は俺、婚約してるらしいんですよ」

「はあ？」

「その婚約相手っていうか、許嫁が小学生なんですよ」

「はあ〜〜？」

「俺、どっちかっていうと熟女の方が好きなんですけど、どうしたらいいんですかね？」

「……お前、良いとこの坊ちゃんが穏やかな人生送ってます、てな感じに見えたけど、隠れ波乱万丈タイプか？」

「なんですか、その隠れ肥満みたいなたえは」

「いやでも、本当にそう見えるしなあ……」

部長は、にやにやと人の悪い顔で、口の端に笑みを乗せた。面白がってるな、これは。

「でもな、別に、ややこしいことないだろ。嫌なら断ればいいだけじゃないか」

「うちの母親の恐怖を知らないから、そんなこと言えるんですよ」

「なんかよくわからんが、それなら、彼女を家に連れて帰ってみろ。一発でご破算になるって」

「今、彼女いないんです」

「あれ？ 確かいたはずだろ？ 美大かどつかの……」

「春先に別れて、それから独り身です」

「すぐ作れよ。ちゃっちゃと」

「無茶言わないで下さいよ。晩メシじゃあるまいし、すぐ作ったり

できません」

「根性が足りないんだよ、モテないわけでもないのに。とりあえず、いないなら誰か適当な子に頼め。同伴帰宅してくれってな。写真部の後輩でもいいんじゃない？　綺麗どころが揃ってるじゃないか」

「うーん……………」

酔っぱらいの戯言とはいえ、なんか説得力あるなあ。しかし、同伴帰宅って正しい日本語なのか？　もうちょっと適切な言葉、ないわけ？　なんか響きが、いかがわしい気がするんだけど。

まあ、お袋の話なんか全然本気にしてないし、無視しとけばいいんだろうけど、凜をすでに巻き込んでるのが気になるんだよ。俺としては、とにかく、穏便に済ませたいわけだ。

しかし、酔ってる部長が寄りかかっていて、いいかげん重い。

「佐々木、佐々木」

俺は佐々木を手招きして呼び寄せると、つつかえ棒係を贈呈した。よし、身が軽くなったぞ。

佐々木は不服そうな顔をしていたが、お前のその有り余る筋肉を有効利用しないでどうするんだ。

俺は佐々木の肩を叩いて、言い訳するように席を立つと、トイレに向かうことにした。

第三話

学祭打ち上げコンパ（後書き）

第四話

大迷惑な源氏物語

ちよつと酔いを醒まして、二階に戻る。

宴もたけなわ。部屋中にアルコールと料理の匂いが充満し、酔っぱらった部員たちが、ふらふらと身体を揺らしていた。

これくらいの時間帯になると、元いた場所から各自、動き回り、気の合う者同士が、気の合う話に花を咲かせている。

出入り口の横では、さくらたちが固まっていた。かしま姦しくも女の子四人かと思いきや、柚希が混じっていた。と言っても、女子会の雰囲気^かを損ねるようなものでは、まったくくないな。両手に花という感じでもないし、完全に溶け込んでいるのが笑える。

「あ、副部長、こつちに座りませんか？」

さくらに呼ばれて、俺はその女子集団に突入することになった。

さくらに亜衣、柚希は前述のとおりだが、もう一人は松浦碧だ。まつうらあおい

碧は文学部二年。この中では、最も長い時間を共有した後輩だが、俺はいまだに碧のことがよくわからない。華奢で童顔。初対面のひとからは高校生に見られているだろう。鎖骨まで伸びた髪がくせ毛で、可愛いといえば可愛い子なんだが、天然でふわふわしていて、どこにピントが合っているのかわかりづらい。

そう、糸のない風船みたいな感じかな。まあ、そういうところも、この子の魅力なんだろうけど。

「何の話で盛り上がったの？」

「源氏物語です」

……それって、盛り上がるようなネタか？

「光源氏の本命は、藤壺か紫のどっちだろうって、現在、白熱したバトルを展開中なんです」

「はあ……？」

不覚だ。

あまり…というか、全然面白くないグループに紛れ込んでしまった。

「わたしは藤壺派で、亜衣ちゃんは紫派なんです。副部長はどっちですか？」

なんかこの、有無も言わさぬ強引な二者択一、誰かを思い出すぞ。しかし、こんな話題で派閥ができてんのか。政治家も真っ青だ。

源氏物語って言われても、ほとんど知らないんだよな。とはいえ、一応上級生として、知らぬ存じぬでは格好悪いか。えっと確か、男前の光源氏が、次々に女を食い散らかす話だったよな。

紫は、子どもの頃から手元に置いて育てた理想の妻で、藤壺は父親の後妻で、憧れの存在……で間違いないかな？

「柚希ちゃんは、どっちなわけ？」

この中では、一番冷静で常識的な感性を持ってそうな、柚希の意見を参考にさせてもらおう。似たようなことを言っておけば、場違いにはならないはずだ。

「源氏物語はちゃんと読んでないんですけど、紫に対する行為は、未成年者略取誘拐にあたる可能性があると思うんです」

ひええええええええ、源氏物語が、未成年者略取誘拐かよ。そうか。法学部だもんな。情緒もへったくれもないな。

「でも、藤壺は父親の後妻ですから、血が繋がっていないとはいえ、直系血族です。よって、父親が亡くなっても、婚姻関係を結ばせん。民法第734条に違反します。したがって、藤壺、紫、どちらも賛同できません」

……………そうですね。そうですね、はい。…いや、なんか違うぞ！

眩暈がしてきた。

「そもそも、どうして最初の妻をもっと大切にしなかったのか、そこが理解できないんです。謎に満ちた物語ですね」

柚希の方が、よほど謎に満ちている。というか、酔っぱらってるんじゃないの、この子。派手な顔して、あんまり強くないんだよな、アルコールに。いや、顔は関係ないか。うーん、俺も酔っぱらってるのかな。

そういえば、光源氏の最初の妻ってだれだっけ？ 全然思い出せないなあ。

柚希の隣で、なぜか碧がそわそわと落ち着かない様子で、ビールを口に運んでいる。どうしたんだろう。

しかし、次々に無差別恋愛を繰り返すのが、源氏物語だろう？ 最初の妻を愛でて終わったら、それはもう、源氏物語とは呼べないのではないか？

残念ながら、柚希の意見はまったく参考にならなかった。この理知的な後輩が戦力外とは、きわめて遺憾だ。しかたがないので、俺

は碧に視線を向けた。

「碧ちゃんは？」

先に碧の意見を訊けばよかった。碧は文学部だから、あんな奇想天外な意見にはならないだろう。

「あたしがもし光源氏だったら、相手が何人いても、そのときはそれぞれ、本気だったと思うんです」

「なるほど……」

俺は感心して頷いた。が、女の子が源氏物語を読んで、自分がもし光源氏だったら…なんて考えるものなの？

「でも現代人の価値観からいえば、平気で浮気するような男は、生きる価値なんかないんです」

おっかねー……。関西人がよく言う「死んだらええのに」って勢いかな。だけど、まあ、そうだよな。二股三股どころじゃないんだから。

でもなんか、話をしているうちに、少しずつ源氏物語の片鱗を思い出してきた。昔、疑問に思ったことがあるんだ。いろんな相手に魅力を感じて、衝動を抑えきれない、というのは理解できる。俺も男だし。

ただ、その人数の多さには、首を傾げざるを得ないんだよな。御簾越しに、文に焚き付けられた香の香りに惹かれて……って、それだけでそこまでするか？　いくらそういうことが認められてた時代とはいえ、大変なエネルギーだぞ。

俺が思うに、光源氏は病気だったんじゃないのかな。多情症とかそんな精神疾患、ありそうじゃない？

作者の紫式部は、そんなひとが身近にいたんじゃないのかな。そのひとをモデルにした可能性はある気がするなあ。

「でも、何度読んでも、よくわからないんです。その時代に生まれて、その時代の文化の中で育って、読んでみたかった物語ですね」

なんか、気合いのはいった意見だ。そういや碧は、酔っぱらうと歴女になるんだった。源氏物語も歴女の守備範囲なのかな。

「俺も、それぞれに真剣だったという意見は納得できるよ。男は馬鹿だから、その時々夢中になって、他のことは忘れてしまっし」

「おお、W松浦で揃えてきましたか」

さくらの台詞に、みんな吹き出した。俺と碧は苗字が同じ松浦だから、こんな指摘になるわけだ。

「でもやつぱり、藤壺じゃないかな。罪を背負ってでも望んだのは、藤壺だけみたいだし」

「ということは、副部長はマザコンですね」

「はあ？ 藤壺を選ぶとマザコンなの？」

「当然です」

「紫を選んでたら、なんて言われてたの？」

「もちろんロリコンです」

なんじゃそりゃ。

「……源氏物語についての討論だよね？ これ」

「副部長がマザコンかロリコンか、調査してたに決まってるじゃないですか」

なにを今更、と続いたさくらの言葉に、俺は後輩たちにかかわれていたのだと気がついた。

「やられた」

こめかみを抑える俺に、亜衣が笑いながら訊いてきた。

「……で、小学生の許嫁がいるって、本当なんですか？」

「……なんでそれを……？」

「さっき部長さんに、そんな話をしたんでしょ？ 伝言ゲームみたいに回ってきましたよ」

うーん……。部屋も広くはないし、声も絞ってなかったから、当然と言えば当然か。しかしこの話、ここにいる写真部全員に知れ渡ったということか。頭が痛いよ。

「わたし、副部長さんは柚希が本命かと思ってたんですけど……」

「亜衣ちゃん、君ねえ……」

「わたしも。瀬戸さんが副部長のモデルするって聞いたときは、てっきり口説き落とす魂胆かと思ったもん」

「さくらちゃんまで、なに言ってるんだよ」

柚希にモデルを頼んだときは、もう柚希が男だとわかっていたから、そんな下心は毛頭ありませんでした！

「あたしも思った」

とどめは碧か。『ブルータス、お前もか』と呟いたジュリアスシーザーの気持ちか、いまようやくわかったよ。

「碧さんまで……」

がつくり脱力してるのは、俺じゃなくて柚希だ。

「でもあたし、聞いたことあったでしょ。副部長とつきあってるの？ って」

「事実無根なんですから、忘れてください」

「一時、うちのブログでも話題になってたんですよ」

「亜衣ちゃんのブログに？　なんて？」

俺の問いかけに、心底愉しそうな様子の亜衣が説明してくれた。

「柚希がうちのブログにコメント書き込むとき、ハンドルネームが

『ユズ』なんで、読むひとが読んだらすぐわかるんです。で、『写真部の先輩とふたりでカラオケに行った』って書いたことがあって、みんなが推察してたんです。柚希のデートの相手は誰だろうって」

「すごい。瀬戸さん、やっぱり人気あるんだ」

「碧さん、怒るか妬くかしてください。無邪気に喜んでないで……」

「なんで？ モテるのカッコイイじゃん。それに、カラオケ行ったデートの相手、副部长でしょ。そのときモデル引き受けることになった、って言ってたじゃない。怒ったり妬いたりするようなことなの？」

「……いえ……」

柚希が溜め息をついた。

亜衣やさくらに同じことを言われてもまるで意に介さないのに、碧の言動にだけ敏感に反応しているのは、現在このふたりがつきあっているからだ。

揉めるだけ揉めて、学祭の最終日にまとまったから、まだつきあい始めて一週間の初々しいカップルである。どう見ても男女交際しているような絵柄には見えないけど。

碧に男だとはれてひと悶着の後、つきあうようになってから、柚希は自分の性別を周囲に隠していない。だから、写真部の部員は全員、柚希が男だということも碧とつきあっていることも知っている。柚希と碧のこんなやりとりも、珍しい光景ではなかった。

さくらの弁を借りるなら、世にも面白いカップルだ。

「副部长、マザコンはともかく、小学生は犯罪ですよ。ヘンタイで

すよ。人間失格ですよ。もう二十歳過ぎてるんですから、事件になったら全国に名前が公表されますよ」

さくらはときどき、刃物のように鋭いことを言う。

「……………肝に銘じるよ」

「松浦さん、熟女好きは個人の嗜好ですけど、不倫は犯罪ですよ」

柚希はときどき、……………以下同文。

「……………重ねて肝に銘じるよ」

家ではお袋にホモや不能の疑いをかけられ、コンパでは後輩にマザコンのお墨付きを頂戴し、ロリコンや不倫は犯罪だと釘を刺された。

……………なんて一日だ。

第四話

大迷惑な源氏物語（後書き）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0777z/>

M大写真部副部長の喧騒

2011年12月5日22時46分発行